

未来から来たラブレター

裴 知 潤(高等部 最優秀賞)

「お元気ですか。私は元気です。」皆さんはこの台詞を覚えていますか。これは日本の映画、『ラブレター』の中で使われました。特に「お元気ですか。」から始まるこの台詞は亡くなった恋人が忘れられない女の主人公、渡辺博子の切ない思いが良く表れており、韓国でもとても有名です。

この映画は、主人公の渡辺博子が亡くなった恋人、藤井樹の3周年の後、樹の中学時代の卒業アルバムを見ていたところ、樹の昔の住所を見つけて、「拝啓、藤井樹様、お元気ですか。私は元気です。」と手紙を書く場面から始まります。ところが、実はその住所が中学時代、樹と同姓同名だった女の子の同級生の住所だったので、博子と女性の藤井樹はお互いに手紙のやり取りをするようになり、女性の樹は博子に自分が覚えている少年樹との思い出を手紙で送ってあげるようになります。

私はこの映画を見て、女性の樹が持っている学生時代の思い出がとても美しく本当に感動しました。少女樹が図書室で本の整理をしたり、学校の自転車置き場で少年樹を待ったりする姿などは今の私たちのような青少年が感じることのできない余裕とあたたかさがあるからです。今の私を含めて韓国の多くの青少年たちは激しい受験戦争で大きなストレスを受け、学校と

塾に行く生活をくり返しなが、毎日同じ生活を送っています。こんな環境の中で、果たして少女樹が持っている学生時代のあたたかくて余裕のある思い出を私たちももつことができるでしょうか。

20年後の私が学生時代をふり返って今の私に「お元気ですか。」と聞いたとき、私はうまく答えることができるかどうか気になります。でも心配はしていません。私は学生時代に必ず、美しい思い出を残したいと思っています。ただ大学に入るための勉強だけをするのではなく、余裕をもって自分自身を再発見し、私の夢がかなうように努力したいです。登校、下校、毎日毎日学校と家を行ったり来たり、同じことのくり返しかもしれませんが、私はすべてに集中するつもりです。うれしい時も、かなしい時もその瞬間の自分自身を大切にしたいです。日々の生活の中で単に過ごしてしまいそうな小さなことでさえ、関心をもつつもりです。今のこの瞬間は二度と戻ってこない美しい瞬間ですから。

こんなふうに毎日毎日を大切にしながら、余裕をもって自分自身を愛するとき、今の私は未来の私に自信をもって答えることができるでしょう。

「はい、私は元気です。」

「声」からもらった私の夢

李 ソラ(高等部 金賞)

私は声が好きです。「いったい何だ？やぶからぼうに…」と頭を傾げている方のためにもう少

し詳しくいうと、私は声だけで全てを表現できる人たち、つまり声優が好きです。

私はこの一年間、ずっと声の世界にはまっています。それまでは、アニメやゲームがけっこう好きな方だったけど、その中でとても肝心な部分を占めている声優についてはあまり興味がなかった私が、声優の世界にとっぷりとはまってしまったのは、去年の春頃。

同じ塾に通ってる友だちから、「これちょっと聞いてみて、とても面白いよ。」と渡されたのが、ドラマ CD というものでした。ドラマ CD といえば、普通テレビで見ているドラマを CD に入れたものだとかよく誤解されますが、実は声優さんの声だけで作られた、まさに『音だけの』ドラマです。はじめてそれをもらったときは、別に興味はありませんでしたが、その CD の原作が、実は私がとても好きな漫画だということを知って、一度聞いてみることにしました。

そしてそれは、あっという間に私を声の虜にさせました。今までこういう世界が存在することを知らなかったのが悔しくなるくらいに、声優さんの声と芝居は、私と心を鷲掴みにしてしまったのです。それにあの世界は知れば知るほど奥が深いもので、「これじゃまだ足りない、もっともっと知りたい！」という一心で一年が過ぎてみると、私は一端の声優マニアになっていました。

この一年間ずっと追いつけてきた声の世界は、私にいろんなものをもたらしてくれました。なかなか上手にならず、いつも悩みの種だった日本語の聞き取りもびっくりするほど上手になったし、普通ドラマやバラエティーではあまり接することができなかった言葉や、声優ならではの正しい日本語の発音も少しは身につけるようになりました。そして何より、ぼんやり漠然としていた私の夢を、確実に目に見えてくるものへと変えてくれたのです。

今、私の目標は、日本の声優になって、いつか私が憧れてる声優さんと共演することです。決して簡単ではないでしょうが、だからこそ挑んでみる価値があると思います。大好きな人からこんなに関心を持ってもらって、私は大変幸せ者かもしれません。

夢を夢のままに終わらせないように頑張っていける力を、今の私は充分もっていると思います。そしてこの力は、彼らの声が聞こえ続ける限り、簡単に消えたりはしないはずですよ。いつか「あなたのおかげで、ここまで来ることができました。ありがとうございます。」と彼らに告げられる日がくると信じて、これからも頑張ろうと思っています。

アジアの文化中心都市、私の故郷光州

ト 滋慶(高等部 銀賞)

私は、文化交流とアジア人の心の交流について私の故郷、光州とともにお話しようと思います。皆さんは文化中心の都市という言葉をお聞きになったことがありますか。韓国政府は各地域の発展のため、地域特性化というものを行っています。光州は、そのなかでも文化中心都

市の役割を果たすこととなります。

私の故郷光州は、昔からエヒャンと呼ばれました。芸術の故郷という意味です。そこには少し悲しい理由があります。光州はソウルから遠く離れているため、朝鮮時代に政治的な流刑になった文人たちが大勢送られたところですよ。

彼らは文学や絵、歌などをこの地に広めてくれたのです。光州はそういう伝統文化とともに現代的な文化も活発に発展してきました。光州の有名な文化祭には光州エヒャナーレをはじめ、イムバンウル祭、国際映画祭、デザインエヒャナーレ、キムチ祭などがあります。

エヒャナーレは世界各国の有名な現代美術家たちが2年に一度集まり、その芸を披露しています。イムバンウル祭は、全羅道の声、韓国の声を世界各地の人々に聞かせることで美しい韓国の文化を誇ります。国際映画祭はアジアの映画を中心に、一般市民に面白い映画を見せたり、日本映画も紹介されています。キムチ祭は私が考えている一番面白い祭りです。なんといっても食べ物の祭りだからです。食文化こそがその国の人を身近に感じられる重要な要素だと思います。

このように私の故郷、芸郷、光州では昔と今

の文化が祭りを通じて混じりあい、見て聞いて食べて直接世界各国の人々と楽しみの心を分けあっています。

今年の11月には光州に国立アジア文化の殿堂が建てる計画が通されました。そこで韓日をはじめ、全アジアの人々が集まり文化交流が今よりもっと盛んになることでしょう。

私はこんな光州に大きな自負心をもっています。冬のソナタみたいなドラマ、プラザーフットといった映画、ボアのような歌手の歌声がアジア人の心を結んで相互交流ができるようにしています。光州に国立アジア文化の殿堂が完成すれば、光州でアジア各国の文化が紹介され、アジアがひとつになれると期待しています。皆さんも私の故郷、光州でアジアの文化を理解し、心から交流を深める日がくることを祈っています。

日本の先生との出会い

朴 世 美(高等部 銅賞)

私が通っている学校は、日本の高校と姉妹高校になっており、今年は日本の高校から先生がお越しになることになりました。それで私は先生に日本語の個人授業をしていただきたいとお願いしました。先生に迷惑をかけることになるかもしれないと思って最初は戸惑ってまごまごしていましたが、先生は意外にもとても喜んで授業をしてくださいました。

毎日夜10時まで先生と日本語の授業をしながら、私は会話や作文などを学びました。また、日本語の知識だけでなく人生というもの、そして日韓関係についてももう一度考えられるような機会を与えてもらったのです。

今までの私は入試のことが人生で一番大事だと思って、毎日もっと知識を蓄えようと頑張っていました。だけど、真剣に「人はなぜ生きるのか、どのように生きるべきか。」ということについては考えたことがなかったのです。先生は私に「今なぜ勉強してるの？なぜ日本語を学んでいるの？」と聞きました。それは常に意識していくべきことなのに、私はすっかり忘れたまま毎日を過ごしてきたのです。

先生はまた韓国と日本の学生たちについて教えてくれました。目上の人を尊敬する韓国の学生たちと、どうしたら大人になっていけるのかを常に考えている日本の学生たち。お互いに

似ているところも多いが、異なるところも多いので、交流を通じて違いを見つけ、お互いのいいところを受け入れるようにする姿勢も大事だということがわかりました。

もう一つ私が考えてみるようになったのは偏見についてです。私たちは知らないうちにいろんな偏見に囲まれて生きています。特に、日本に対しての偏った考え方は、マスコミと学校の教育によってもたらされているのではないのでしょうか。しかし、いつまでも日本を敵にする考え方では、これからも日韓関係は悪化するだけだと思います。日本で起きている韓流ブームのように韓国でも日本の文化の中でいいところを受け入れるように努力したり、教育現場でも日本のことをただ加害者だと解釈せず、どうすればこれからの関係が改善できるかを考えてみる必要があると思いました。

こんな過程を通じて私は将来の夢をはっきりとさせることができました。それは、新聞記者になることです。韓国人に日本のことを偏見なく客観的に伝える新聞記者になることです。この思いが強くなったのは、将来について学歴を追求するのではなく、自分が本当にしたいこと、そして社会に役立つために何をしたらいいのかを考えた結果だと思います。

私は、これからも国の壁を超えて、先生とのふれ合いを大切にしていきたいと思っています。そして、もう一つの希望をいえば、私の後輩たちも私のような出会いを経験して日本という国を考え直せるような機会をもってほしいと思います。そうして、日本と韓国を「近くて遠い国」ではなく、「地理的にも近く、感情的にも近い国」として変えていきたいです。

文化遅滞現象をご存じですか

申 熙 晶(高等部 優秀賞)

皆さん、10年前を思い出してみてください。今と比べてどう違っているでしょうか。携帯電話も、オンラインゲームも、そこには見つからないでしょう。

では、今日はどうですか。人々は道を歩きながら電話したり、家でインターネットを通して買い物します。昔は一泊二日の距離だったソウルからプサンも4時間で行ける時代となりました。何気なく聞いたらとても便利になったと聞こえるかも知れませんが、そうでしょうか。その裏側には違う面が隠れているのです。

私はエスカレーターに乗るとき、進路をふさがれて追い抜けず困ったことがあります。そしてインターネットで悪口だらけの掲示板やポルノ

サイトの広告をまゆをひそめながら見たこともあったのです。皆さんはこういう経験がありませんか。私は今日、このような問題を皆さんにお話ししたいと思います。

このように、物は発達していくのにも関わらず、人々の認識はそれに合わせてついていかない場合を「文化遅滞現象」といいます。「文化遅滞現象」とは急速に発達する物質文化に対して、ゆっくりと変わっていく非物質文化の変動速度の違いから生じてくる社会的不調和を意味します。物質文化はもっと便利に、それに急速に発達していくのに、人々の認識、政治制度、行動様式などは昔の水準で止まっている。これは近

い未来に大きな問題となるのではないのでしょうか。

では、例えばどんな問題があるのでしょうか。まず、インターネット上での問題があるでしょう。たとえば、著作権の問題があります。歌や有名映画など、ネット上でこういう不法ファイルを見つけることはあまり難しくありません。人々はネット上のものはただで利用できるという考えが強く、こういう不法ファイルを何気なくダウンロードして楽しんでしまうのです。もちろん有料で音楽、映像ファイルを提供するサイトもありますが、普通の人々は有料ファイルよりただで楽しめるファイルを求めがちです。こういう状況で困るのは著作権者たちです。苦労しながら作った作品なのに正当な報酬を得ることもできず、次の作品をがんばって作る気さえなくしてしまうのです。その結果、衰退する文化に接するのは誰でしょうか。ただで不法ファイルを楽しんだ人々です。

最近、よく起る軍隊内の事件も文化遅滞現象の一つです。軍隊の外では自由だ、人権だと叫んでいるのに、軍隊の中では体罰まで行われているそうです。自由で豊かな生活を楽しん

だ人がそんな軍隊の中で適応することは確に辛いでしょ。外とはかなり違う、昔の保守的な軍隊。その軍隊に適応できなかった人々が苦しんだあまり、自殺や銃器の乱発による無差別殺人に結びつくのです。皆さんもこの間起った残酷な事件を覚えているでしょう。昔の制度が残したのは無辜の人々の死と周りの人々の悲しみだけです。

普通、文化遅滞現象とは電車の中で大きい声で通話するおじさんぐらいしか思い起こされることもないでしょう。しかし、文化遅滞現象というものは上のように深刻な問題を惹き起こす可能性ももってるのです。

都市文明は科学技術の発達の上に成り立つともいわれます。しかし、その中に住んでいる人々が農耕時代の人々だったらこれは深刻な不調和でしょう。

皆さん、なんとなく無料音楽ファイルを聞く自分をエスカレーターの進路をふさいでいる自分を一度振り返ってみてください。自分はこの豊かに発達した文明に合った行動ができていますか。私ももう無料での音楽ファイルのダウンロードをやめなければならないんですけどね。

ありがとう

申 恵 真(高等部 優秀賞)

私はこれから、私たちが日常生活でなにげなく使っている「ありがとう」という言葉について話してみたいと思います。この言葉は皆さんもご存じの通り、感謝する気持ちを伝える時よく使われます。まったく知らない人にもなにげなく使っている言葉ですから、皆さんも一日に二、三度ぐらいいは使っているでしょう。

ところで皆さん! この「ありがとう」という言葉を本当に心からいっているのでしょうか? そんな偉そうなところをいっている私も実は、あまりいっていないのです。朝早くから起き、おいしい朝ご飯を作ってくれる優しい母。この受験地獄の中、共に手を取り、支えあい、いつも側にいてくれる友だち。あたたかく私を励ましてくれる先生…。

私が今、このように生きており、無事に高校生活を送ってられるのも、このような人たちのおかげではないでしょうか。しかし、悲しいことに、私はいつもありがたいなあ…と思いながらも、それを口にするのはなかなかできませんでした。そんなある日、私は一つ、決心をしました。「皆のおかげで私は幸せだ。本当にありがとう」という私の気持ちを、伝えよう」と。すぐく恥ずかしかったけれど、勇気を出して家族、友だち、そして先生に真心を込めて「ありがとう」といってみました。

「ありがとう」という言葉は、人を幸せにする力をもっている言葉だと思います。人から「ありがとう」といわれたら、誰でもすごくうれしくなるからです。何より心をこめて感謝するとき、胸が

幸せで一杯になるというのを私は感じます。でも、大人になればなるほど、心のこもった「ありがとう」という言葉を口にするのが少なくなりました。身近な人であればあるほど、もっとそうなってしまうようです。でも、私が今まで、母に対する思いを込めて「お母さん、いつもありがとう」といったとき、その母の顔に浮かんだ幸せ一杯の微笑みを、私は一生忘れることができません。

初めは、テレや、戸惑いもあるかも知れませんが、でも、「ありがとう」というその一言で、いった人も、いわれた人も、心が暖かくなり、癒され、また励まされ、幸せを感じるのです。皆さんも、大切に、ありがたい人たちに本当の気持ちをいってみませんか？

私の夢

金 度 亨(高等部 優秀賞)

私の夢は国境を越えて世界を舞台に活躍できるジャーナリストになることです。そのために日本を留学先と選択し、高校2年の時から日本語も勉強してきました。私が夢を叶うために日本を留学先として選んだのは「世界の有名大学」というテレビ番組を通して、ある日本人大学生に出会えたのがきっかけです。

「雄弁会」という大学のサークルで、新入生の講演者として登場したその学生は、発表の際に、理論不足や古臭い考え、さらには曖昧な問題意識などを厳しく突き詰める先輩たちの怒鳴り声にうろたえて非常に萎縮されていました。しかし、発表後彼は、取材するリポーターの質問に対して、「世を動かしていく人になるためには、普段の姿勢ではだめだ。曖昧なまま、ことが進んでいくのが一番よくない。おかしいと思っ

たことは徹底的に突き詰めていくべきで、今やっていることのすべてが社会を変えていける人材になるための過程である。」と述べながら、冷汗をかいたその瞬間までを自分の成長のための過程として受け止めて、新たな覚悟で自分を固めようとする堂々たる姿を見せました。

恥ずかしいことに私は、それまで将来ジャーナリストになって世界を舞台に活躍したいと思いつつも、その夢を実現させるためには、自分をどのように育てていくべきなのかなど、一度も真剣に考えたことはありませんでした。しかし、テレビ番組を通じて出会った一人の日本人青年によって強く刺激され、自分の人生に対して怠惰でいい加減だった私自身を反省すると同時に、彼のような人と肩を並べてみたいというファイトが湧いてきました。

私が描いているジャーナリスト像は、冷静な知性と世に対する深い理解を兼ね備えているべきだと思います。そして、あるテーマに対して答えるとき、一つの枠組みだけで議論するのではなく、他の立場に立ったら、別の考え方もあるというような柔軟な視野も獲得しておくべきだと思います。

私はそのようなことを身に付けるために、これから大いに努力していきたいと思っています。そ

して、その第一歩を、人生に対して怠惰でいい加減だった私のことを目覚めさせてくれたその日本人青年の国で、彼のような姿勢をもって、始めたいと思います。それから、世界が変化していくのに役立つ人材として成長できるようにできるだけ多くの知識と経験を積んでいき、21世紀社会のあり方を構想するのに大いに貢献したいと思います。

日本語を習いながら気づいたコミュニケーション

金 ヒョンジン(中等部 最優秀賞)

皆さんはコミュニケーションというと、どんなイメージが思い浮かびますか。私は、「そんなもの、自分とは関係ないな。」と思っていました。

私は小学校6年のとき、母の知り合いに誘われ、日本語の塾にて日本語を習い始めました。当初は、漠然とした反日感情をもっていたし、日本語を使う機会なんてないと、思ったので、ただほんやりと塾を通うだけでした。もちろん、塾に通うだけに、ひらかなとカタカナを覚え、あいさつくらいは少しできました。

そんな私に、日本語を使う機会がきました。「プールン生協」という農産物を販売する団体から、韓日青少年の交流がありました。下手でも2年間も習った日本語でしたので、少しは話せる自信がありました。でも、いざ日本人を相手にしては、話すことが聞きとれなかったし、話したいとも言えませんでした。

日本語を2年も習ったわりには、少し恥ずかしくなりました。そんなことがあってはじめてまじめに日本語を勉強することになりました。そして、

日本への関心も高くなり、日本人の友だちとの交流ができるようになりました。

去年の冬休み、はじめて日本に行けるようになりました。少し日本語も話せるようになったので、自信たっぷりでした。日本の文化とか礼儀についてそれほど知識がなかったので、人とのコミュニケーションは問題ありませんでした。

なんとといっても、はじめての外国旅行だし、ひとりでの旅行だったので、とても満足でした。違う言語を使う外国人とのコミュニケーション。そして自ら体験できるというプライド。それはとてもすばらしい思い出でした。

コミュニケーションという階段はのぼり続けても終わりはないが、のぼればのぼるほど、その満足度はますます大きくなる魅力的なものだと思います。私は今、韓国語をベースに日本語を習いながらコミュニケーションの階段をのぼろうとしています。途中、ペースが遅くなっても、焦ることなく、これからも自分なりの満足を探しながらのぼり続けたいと思います。

ボランティアの意味

金 秀 映(中等部 金賞)

皆さんは『ボランティア』について、どう思いますか？私は数日前に地方のエヒャンウオンという障害者リハビリセンターに行って、三日間ボランティア活動をしてきました。

初め、母から一緒に行こうといわれた時は、ただ学校を休めるのがとてもうれしかったです。でも、障害者を手助けするためなのだと知らされたとき、私はテレビで見た障害者たちを思いだしました。記憶のなかの彼らは、とてもこわい人たちでした。

エヒャンウオンに着くと、ボランティア・グループの団長は、「障害者たちはスキンシップが一番好きなんです。手をとったり、たくさん抱きしめてあげるとよろこびますよ。」といいました。私はその話を聞いたとき、「そんなことできるはずがない。」と思いました。しかもそこではじめて見た本物の障害者たちの顔は私をもっと怖がらせました。

その日のボランティアは、障害者たちと一緒に遊ぶものでした。障害者の方たちは外でなわとびをしたがったので、私たちは一緒に外へ出ました。外ではたくさんの障害者の方々が遊んでいて、私も一緒になわとびをすることにしました。ところが、ある障害者の方は私たちの前とぶのが恥ずかしいのか、なわとびをしなかつ

たのです。それを見て私は障害者の方たちもみんな感情をもっているんだということにふと気づきました。

私は今まで彼らを『障害者』と呼びながら、私たちが助けなければならない人たちだとだけ考えていました。けれど、実際みた障害者の方たちは、みんな一人一人、心や感情ある人たちなのだということに気づかせてくれたのです。そう考えなおすと、今までただ怖く思えた障害者に対する偏見が多少消えました。「彼らも私たちと変らない人」という思いが、私にすすんで障害者の方たちに手をさしのべて、一緒に遊べるきっかけになりました。

普通、人々は対価のないことにはあまり努力をしません。障害者の方たちはどんなことにも対価を望まずに自分が感じたものをそのまま表します。それは私たちに自己中心的な自分を振り返らせません。もっと深く考えてみると、障害者は私たちではないかということまで思いかぶのです。

ボランティアの本当の意味、それは彼ら障害者と会うことで自分の生活をもう一度見直して、彼らともっと近くなりながら、日頃の私たちの自己中心的な姿を捨てることではないでしょうか。

叩け、さらば開かれん

盧 知 英(中等部 銀賞)

みなさんは韓国ブームについて聞いたことがありますか。多分、マスコミなどで色々報道されているのでよく耳にしたことがあると思います。

今、日本では韓国ブームだそうです。韓国ブームは、韓国の芸能人や様々な文化が外国でも人気を集めたりすることです。「冬のソナタ」

や「ヨン様」という言葉を聞いたことがない人はほとんどいないと思います。その韓国ブームのおかげで韓国について全然関心がなかった日本の方々も、韓国ブームを通じてどんどん関心を持つ人が多くなったそうです。

もちろん、韓国でも日本文化に関心を持つ人が多いです。J-POPや日本のアニメに興味がある人もたくさんいます。実は私の場合も、日本のアイドルが好きで、それで日本そのものに関心を持つようになりました。

その一方、韓国ブームに反感を持つ嫌韓流とか、日本のことなら何でも反対する反日の人もあります。いろんな文化交流で、お互いずいぶんと話し合ったはずなのに、どうしてこんな人たちがいるのでしょうか。それは、心を開いていないからです。

心を閉じたまま、お互いをわかり合おうとしないまま、何の理由もなく相手を嫌がるのです。こんなふうに関心した交流はどんな進歩もないし、どんな明るい未来などないはずで、心を閉じたままの話はお互いを傷つけるだけです。結局、争って、ケンカして、状況は悪化される一

方ですし、第一、会話自体が成立しないかも知れません。

大事なものは、心を開くことです。お互いを尊敬しながら本音を出して話し合えば、お互いの誤解がなく、どんなことでも話し合えるはずで、こんな心構えで話し合ったら、お互いにいい方へ向けて結論がでるはずだと思います。

私は、国際交流というのはそれほど難しいことではないと思います。むしろ、誰にでもできることだと思います。今、私が、そしてみなさんが、自分の国への愛国心はもちろん他の国もきちんと理解しようと思って、大きく心を開いてお互い話し合うこと。それこそが立派な国際交流だと思います。

よく、日本人は本音を出さない民族だといわれます。でも、私は違うと思います。どんなに心を開かない日本人でも、私から先に心を開いて声をかけると、その心がノックになり、相手もきっと心を開いてくれるはずだと。そして、心からの言葉で話し合ったら、韓国と日本の明るい未来を築いていけると強く信じております。

コミュニケーションの大切さ

陣 ソンミン(中等部 銅賞)

私は子どものころからひかえめな性格で友達と遊ぶことができず、主にひとりでゲームと本が好きでした。それは、パソコンさえあればいくらでも情報を得ることができるし、いろいろなゲーム、漫画などがいくらでも楽しむことができるので、私はもっとひとりぼっちになる生活をしてきました。

去年の冬のできごとです。ひとり遊びが好きで私はプラモデルづくりに夢中でした。とくにガ

ンダムシリーズがそうです。小遣いでひとつ、ひとつは買えましたが、それ以上買うのは無理でした。それである日、母がちょっと出かけたときに、お金をこっそり持ちだしプラモデルを買ってしまいました。お金を盗むのははじめてなので、胸がどきどきしてすごく不安で犯罪というのがこんなに恐ろしいことかとやっとわかりました。ばれないように1ヶ月間粘りましたが、結局ばれてしまいました。

家族生活のなか、もっとも大切なのは、心をひらいて家族間でコミュニケーションをすることだし、私たちが住んでいる社会での大事な手段がコミュニケーションだと、いつも父からいわれてきました。

心をひらいて言葉もいいし、文字もいいし、身振り手振りでもいいから、相手とコミュニケーションしてみなさいといわれました。いつも部屋に立てこもってばかりでは人とのコミュニケーションができないし、信頼をもとにした人間関係づくりが難しくなり、社会生活ができなくなるとずっと強調してきましたので、私が犯した悪いことに対しても父は大変怒りました。父は家族の間でもコミュニケーションができないから、こういうことが起きたと親子の間の信頼が崩れて二度と私を見たくないといいました。私は父にそんなに怒られてのははじめてでした。

私もいろいろ考えながら反省しました。今回のことをきっかけに私も少しでもコミュニケーションをしようと決心しました。学校で友だちとコミュニケーションをしてみたら、思ったよりうまくいきました。私が心配していた仲間はずれは自分だけの考えで、友だちは全然気にしてなかったのです。今は、友だちも大勢できて学校の生活がとても楽しいです。先週はゲーム同好会にも行ってきました。中学生や高校生や大学生まで参加した同好会で、一日ゲームをしたり情報を交換したりカラオケもやったり、とても楽しかったです。この調子だと多分うまくいくと思います。父もよろこんで応援してくれます。いくら難しいことでもやりもせずあきらめるは馬鹿だと思います。これからも私は難しいと思うことをひとつひとつ挑戦してみたいと思います。

